

# 金華山のサル・行動圏を越えて B<sub>2</sub> 群に追隨した B<sub>1</sub> 群

京都大学 山口飛翔

## 1. はじめに

筆者は 2022 年 11 月 18 日から 11 月 20 日まで金華山のサルの総個体数を調べる秋季一斉調査の一環として、金華山 B<sub>1</sub> 群の調査を行ったが、11 月 20 日に第一位オス「タイヨウ」(山口, 2023a)を含む群れの本体(以下、群れ)が 8 時間以上にわたり、かつ自らの行動圏を離れて B<sub>2</sub> 群に追隨し続けるという事例を観察した(関, 2023 も参照)。この事例は、D 群に対する事例(山口, 2023b)や A 群に対する事例(関沢, 2023)などとは異なり、ほとんど全ての B<sub>1</sub> 群の個体が他群に追隨し、かつ途中で群れから離れる個体がいなかったという点で特異的である。以下にその一部始終をまとめる。

## 2. 事例の概要

### 11 月 19 日まで

「タイヨウ」は 11 月 18 日と 19 日は終日群れの内で確認された。その他の個体も、交尾期に群れから離れることが多い「アカネ」家系の個体(山口, 2020, 2022a)などの一部のメスを除き、全ての個体が両日とも確認された。

### 11 月 20 日

この日も前日までとほとんど同じ個体構成だった。その構成を表 1 に示した。また、B<sub>1</sub> 群の移動ルートを図 1 に示した。

B<sub>1</sub> 群は 09:10 前後に B<sub>2</sub> 群とエンカウト(図 1A の①)。その後は、島の北東部の急峻で入り組んだ海岸線の斜面で筆者が群れをロストする 14:58

表 1. B<sub>1</sub> 群で確認された個体の構成

群れオス	メス		コドモ				アカンボウ
	オトナ	ワカモノ	4 歳	3 歳	2 歳	1 歳	
3	15	3	1	5	0	0	11

註) オトナは 7 歳以上、ワカモノは 5-6 歳。この他に B<sub>1</sub> 群に追隨していたオスは 18 日が 13 頭、19 日が 10 頭だった。20 日は正確な記録がないものの、同程度いたと思われる。ただし、彼らは B<sub>2</sub> 群とエンカウトした後は B<sub>1</sub> 群に追隨しなかった。

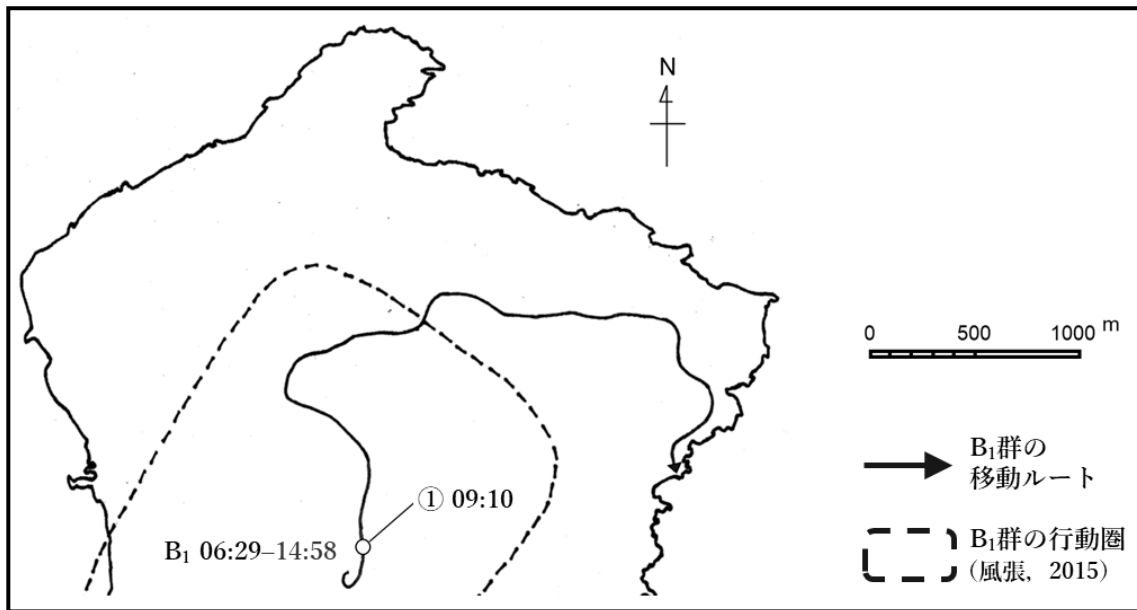


図 1. 11 月 20 日の B<sub>1</sub> 群の移動ルート

まで、B<sub>2</sub> 群に追従し続けた。この間、B<sub>1</sub> 群で確認できなくなった個体は一頭もいなかった。また、ほとんどの時間、群れの視界内には B<sub>2</sub> 群の個体が確認され、群れは「タイヨウ」を先頭に行動圏外に出ても B<sub>2</sub> 群の後を追いつ続けた。

### 3. B<sub>2</sub> 群追従中の「タイヨウ」の行動・交渉

#### 1) 自群のメスたちに対して

B<sub>2</sub> 群とエンカウトした直後に数分間メスと毛づくろいをしたが、その後は採食中を除けばほとんどの時間 B<sub>2</sub> 群の方を注視しており、自群のメスたちとの社会交渉は一度も観察されなかった。また、B<sub>2</sub> 群に追従する際に自群のメスたちが付いてきているかを振り返って確認することもほとんどなかった。

#### 2) B<sub>2</sub> 群の個体に対して

##### a. メスとの交渉

B<sub>2</sub> 群のサルは D 群に比べると人馴れしていないため、筆者は B<sub>2</sub> 群からは可能な限り距離を置いて観察を行った。そのため、正確な回数をカウントすることはできなかったが、D 群追従時(山口, 2023b)と同様に「タイヨウ」



写真 1. B<sub>2</sub>群に近づいていく「タイヨウ」とそれに追従する B<sub>1</sub>群の個体  
点線で囲まれているのが「タイヨウ」、彼の前方にいるのが B<sub>2</sub>群の個体、後方にあるのが B<sub>1</sub>群の個体である。

が尾を上げながら B<sub>2</sub>群のメスに近づき（写真 1 も参照）、B<sub>2</sub>群のメスたちが彼から逃げるように移動する様子を繰り返し確認した。一方で、B<sub>2</sub>群のメスたちは D 群のメスたちよりも近づかれた際に離れるのが早く、D 群と  
のときのように「タイヨウ」がメスの 5m 以内に近づくようなことはほとんどなかった。また、両者の間で社会交渉は一度も観察されなかった。

#### b. オスとの交渉

B<sub>2</sub>群のオスは、「タイヨウ」が近づくときメスと共にすぐに離れるように移動してしまうことがほとんどだった。そのため、彼らと交渉できるほど近づくことはほとんどなく、両者の間に社会交渉は一度も観察されなかった。

#### c. その他の行動

B<sub>2</sub>群に追従中、1 時間当たり 0.59 回 (5 回/8.48 時間) 「タイヨウ」の木揺すり行動が観察された。これは、D 群追従時 (1.24 回/時間) より少ないものの、D 群追従前 (9 月 25 日から 10 月 1 日, 0.03 回/時間) や B<sub>2</sub>群追従前 (11 月 18 日から 19 日, 0 回/時間) よりも顕著に多かった。D 群追従時 (山口, 2023b) と同様に、「タイヨウ」は木揺すり行動によって自身の存

在を B<sub>2</sub> 群のメスにアピールしていたのだろう。このことから、「タイヨウ」は繁殖相手を求めて B<sub>2</sub> 群を追随し続けたのだと考えられる。

#### 4. B<sub>2</sub> 群追隨中の B<sub>1</sub> 群のメスたちの行動・交渉

##### 1) 「タイヨウ」に対して

全てのメスが調査終了時まで B<sub>2</sub> 群の後を追う「タイヨウ」に追随し続けた(写真 1 も参照)。また、本事例では D 群追隨時(山口, 2023b)のように「タイヨウ」が突然走って移動することがなかったため、メスが彼を見失うことはなかった。一方で、第 3 章第 1 項で触れたように、彼との社会交渉は毛づくろいが一度観察されたのみだった。

##### 2) B<sub>2</sub> 群の個体に対して

「タイヨウ」が近づくとすぐに B<sub>2</sub> 群の個体が離れて行ってしまうため、メスが B<sub>2</sub> 群の個体の 10m 以内に近づくようなことはほとんどなかった。そのため、社会交渉も一度も観察されなかった。

#### 5. D 群追隨時との比較

類似点としては、「タイヨウ」が B<sub>1</sub> 群のメスに構わず繁殖相手を求めて他群を長時間追随し続け、それにメスたちが追随し続けたことが挙げられる。相違点としては、まず B<sub>2</sub> 群追隨時には D 群のときほど両群の個体が近づくとすることがなく、その結果社会的な交渉が観察されなかった点がある。この理由としては、①「タイヨウ」が頻繁に追随していると思われる D 群(山口, 2023a)に比べると、B<sub>2</sub> 群の個体は彼を見慣れていなかったため、彼が近づくと嫌がる傾向がより強かった、② B<sub>2</sub> 群は個体数が D 群の半分以下のため(伊沢, 2022)、B<sub>1</sub> 群に対する警戒性が D 群よりも高かった、③ B<sub>2</sub> 群は D 群に比べると人馴れしていないため、D 群よりも筆者から離れようとする傾向が強く、結果的に B<sub>1</sub> 群からも離れる傾向が強くなったなどが考えられる。なお、これらの三つは互いに背反ではない。③については、この日は D 群追隨時と異なり調査者が 2-3 人(筆者と少なくとももう一人)いたことも影響しているかもしれないが、B<sub>2</sub> 群のサルが調査者を気にしている素振りにはほとんどなかった。

もう一つの相違点は、今回の事例では D 群追隨時と異なり途中で群れか

ら離れるメスがいなかったことが挙げられる。この理由としては、前章第1項でも触れたように、本事例ではD群追隨時のように「タイヨウ」が突然長い距離を走って移動することがなかったことが挙げられる。D群追隨時に「タイヨウ」が走って移動したのは、目当てのメスの近くに移動しなかったと思われるときや、D群のオスから威嚇を受けたときだった。本事例では「タイヨウ」が十分に近づく前にB<sub>2</sub>群個体が離れてしまったため、そもそもこうしたことが起こる可能性が低かったと考えられる。

ただし、本事例では筆者が群れを見失ってしまったため、D群追隨時に比べると短い時間しか観察を行えなかった。また、11月21日以降は調査を行わなかったため、その後どのくらいB<sub>1</sub>群の個体がB<sub>2</sub>群に追従し続けたかは不明である。筆者が観察できなくなった後にもさらにB<sub>2</sub>群を追従し続け、メスの一部が「タイヨウ」のいる集団から離れることがあった可能性は十分に考えられる。ただし、D群追隨時に利用した島の南東部は、2019年以降「タイヨウ」が頻繁に利用しており（山口，2023a）、それに追従することがあった一部のメス（山口，2022b；Yamaguchi & Kazahari, 2022を参照）にとっては多少馴染みのある場所だった可能性がある一方で、今回利用した場所はメスたちにとっておそらく全く馴染みがない地域が多かったと考えられる。そのため、今回の方がD群のときよりもメスたちが「タイヨウ」と近接を維持しようとする傾向が強く、「タイヨウ」のいる集団から離れるメスがなかった可能性もある。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり、宮城のサル調査会の伊沢紘生先生には終始熱心なご指導をいただきました。また、金華山B<sub>1</sub>群の血縁関係や個体情報は、風張喜子氏をはじめこれまでB<sub>1</sub>群を調査されてきた研究者の方々の継続的な観察によるものです。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 伊沢紘生(2022) 金華山のニホンザル 2022年度・個体数に関する秋季一斉調査のまとめ
- 風張喜子(2015) B<sub>1</sub>群のサルの特徴と今後の課題. 「宮城県のニホンザル」 vol. 28, p. 1-19

- 山口飛翔(2020) 金華山のサル・母親はどこに—“群れの内”に関する事例. 「宮城県のニホンザル」 vol.34, p.62-66
- 山口飛翔(2022a) 金華山のサル・交尾期に群れの内から離れて行動するメス. 「宮城県のニホンザル」 vol.35, p.26-32
- 山口飛翔(2022b) 金華山のサル・2020年交尾期における B<sub>1</sub> 群中心オスの動向. 「宮城県のニホンザル」 vol.35, p.1-12
- 山口飛翔(2023a) 金華山のサル・B<sub>1</sub> 群の第一位オス「タイヨウ」の略歴. 「宮城県のニホンザル」 vol.36, p.1-5
- 山口飛翔(2023b) 金華山のサル・D 群に 2 日間以上追随した B<sub>1</sub> 群の集. 「宮城県のニホンザル」 vol.36, p.6-13
- Yamaguchi, T. & Kazahari, N. (2022) Fission-fusion dynamics in a wild group of Japanese macaques (*Macaca fuscata*) on Kinkazan Island caused by the repeated separation of an alpha male being followed by females. 「Primates」 vol.63 (6), p.575-582